

城の歴史

カステルノー城の歴史は、13世紀初めに遡ります。カステルノーの有力な領主ベルナール・ド・カスナックは、熱心なカタリ派の支持者でした。1214年に、アルビジョワ十字軍を率いるシモン・ド・モンフォールがカステルノーを略奪。翌年の1215年にベルナール・ド・カスナックが城を奪い返したものの、結局ボルドー大司教の命令で城は数か月後に焼かれてしまいました。13世紀中には再建が行われ、この当時の正方形のドンジョン(主塔)と幕壁が現在まで残っています。

カステルノーは引き続きペリゴール州の有力な中心地としての地位を保持していきます。やがて、対岸に位置するベナックと敵対関係になりましたが、この二つの巨大な石造りの城砦が直接対決することはありませんでした。

1337年に百年戦争が勃発。カステルノー城は、マーニュ・ド・カステルノーとノンパール・ド・コーモンの婚姻によりコーモン家の所有となりました。コーモン家はイングランド、ベナック諸侯はフランス側を支持していました。1世紀余りの間に、カステルノー城の所有は11回も変わることになります…。シャルル7世の命による包囲戦が3週間続いた後、1442年に城は完全にフランスの手中に収りました。

百年戦争が終局を迎えると、城を取り戻したコーモン家は再建に着手します。守備の必要性がなくなったわけではないからです。側庭は、銃眼を備えた半円形の2つの塔によって守られ、跳ね橋と新しい外堀が造られました。また、ドンジョンの隣に住棟が建てられました。カステルノーはその後も領主権力の中枢拠点であり続けました。1520年に造られた砲塔がその勢力の強さを象徴しています。

コーモン家はプロテスタント教徒になりました。カステルノー城で生まれたジョフロワ・ド・ヴィヴァン大尉は、城砦を守り、カトリック教会に激しく対立し、やがてこの地方全域で恐れられる存在となりました。その証拠に、宗教戦争の間にカステルノー城の攻略を試みる者は誰もいませんでした。こうしてコーモン家は引き続き城を所有しましたが、あまりに住み心地が悪かったため、城に住むことはほとんどなくなりました。

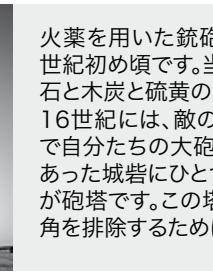
フランス革命が終わる頃、草木にすっかり覆わるほど放置されていたカステルノーは、間もなく採石場となります。1832年に、河川輸送の発達とカステルノー村の解放に伴い、河港に船台を建てることになったとき、新たに石材を切り出すよりも、城の南側の石をいくつか取ってくるほうが石工職人にとっては楽だったのです。こうして、石の塊は何の苦勞もなく、斜面を転がりながら建築現場に無事到着しました！

カステルノー城は、新たに所有者となったフィリップ・ロションとヴェロニック・ロション夫妻の申請をうけて、1966年に歴史的建造物に指定されました。今日、カステルノー城は、夫妻の息子であるクレベール・ロションの所有となっています。

→ それでは、円形の砲塔の方へ向かい、隠し戸から中へお入りください。

砲塔

隠し戸は、主要出入口の反対側に設けられた、たいてい隠れて見えない小さな扉です。包囲戦の間は、反撃を準備するための出口として使われました。



火薬を用いた銃砲が初めて開発されたのは14世紀初め頃です。当時使われた火薬の原料は、硝石と木炭と硫黄の混合物でした。16世紀には、敵の砲兵射撃から城を守り、城側で自分たちの大砲を配置できるように、もともとあった城砦にひとつの塔が付設されました。それが砲塔です。この塔は、壁が厚さ5メートルで、死角を排除するために円形の造りになっています。

1階

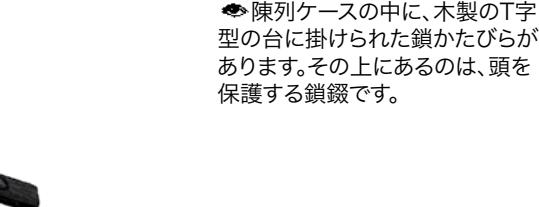
射撃部屋に設置されているのは、16世紀に作られた小型軽砲です。

砲塔(続き)

4階

こうした新しい大砲技術から生まれたのが、後装式大砲、カルヴァリン砲。多連装砲車です。

部屋の中央に見えるのはサーペンタイン砲です。



右手の、ニッチと呼ばれる壁の窓には、着脱式の薬室によって薬が容易に行える後装式大砲が展示されています。

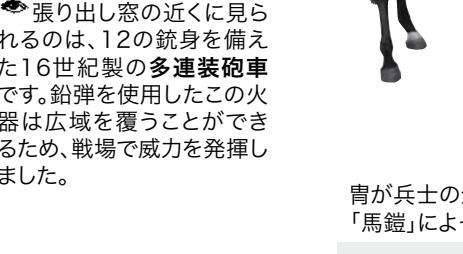
陳列ケースに展示されているのは火縄銃です。こうして武器が軽量化されたことで、兵士は一人で持ち運びができるようになり、新しい点火システムによって他の兵士の助けが不要になりました。

窓の右側の陳列ケースに火壺に混じって展示されているのは、ドイツ製の青銅製警砲です。ゴシック体で、以下のような内容の碑文が刻印されています。

3階

銃眼を塞ぐ3つの火器があります。右側は手銃(火縄銃の原型)、残りの2つは後装式大砲です。

射撃が行われたこの塔の3階の丸天井のヴォールトは、中央に四角形の揚蓋が設けられており、武器弾薬や大砲の部品などを容易に上げ下げすることができます。



→ 砲塔を出ると、かつては屋根のあった住棟の階へ通じる階段があります。

テラス

この大型の床子弩は、飛距離が200メートルで、その矢は3人の兵士と馬一頭を貫通して扉に刺さるといわれるほど強力な武器です。

ドルドーニュ川流域とセウ川流域を見渡す全景を目の前にすると、この土地の戦略的重要性を容易に想像することができます。

絵画展示室

11世紀と12世紀、兵士は、剣の刃や矢から身を守るために鉄の鎖かたびらを身に着けていました。

部屋の中央に見えるのはサーペンタイン砲です。

陳列ケースの中に、木製のT字型の台に掛けられた鎖かたびらがあります。その上にあるのは、頭を保護する鎖鎧です。

これに続いて、鎧付き弩が誕生します(入口から入って右手にある陳列ケース)。これは特に騎兵隊が使用したものです。

弩はますます強力になり、滑車装置とも呼ばれる弩をぴんと張るための器具(左側の矢狭間)を使用するほどでした。大型で扱いにくく、速射性に欠けるこのメカニズムは、要塞の守備や包囲の場合に歩兵によって用いられました。

弦巻上式弩は、滑車装置を備えたタイプと比べて同等の効果を発揮するにもかかわらず高速で、場所も取りません。軍隊でこのシステム(ダブルショーケースの中)を最後に使用したのは、フランソワ1世の騎馬近衛兵でした。

小球用弩(ニッチに収められた大型のケースの中)はとても軽く、兔や野鳥などの小動物の狩猟に最適です。この弩を使って、テラコッタまたは鉛の小さな丸い球を飛ばすことができます。

装備をまとった騎士と馬の姿を描いたシーンが展示されています。プラット甲冑が兵士の全身を覆っているのに対して、さまざまな甲冑で構成される「馬鎧」によって馬の急所が覆われています。

2016年制作の壁画は、「九偉人」の作品群です。騎士を描いたこの制作プログラムは、騎士道を体現する偉大な人物とされた英雄三人を一組とした三段構成になっています。奥の正面から左に向かって、異教徒の偉人ヘクトール、アレクサンドロス大王、カエサル、ユダヤ人の偉人ヨシュー、ダビデ、ユダ・マカバイ、そして右側にキリスト教徒の偉人アーサー王、シャルルマニュ、ゴドフロワ・ド・ブイヨンとなっています。15世紀ヨーロッパ独特のこの装飾は、理想の騎士像に自らの姿を重ね合わせた貴族たちに大変好まれました。「デトランプ」技法(天然顔料をカゼインの中に溶いてドライ石膏に塗る絵画技法)を用いて描いたもので、当時の色調が忠実に再現されています。

→ 部屋を出て左手にある狭い階段を上り、ドンジョンの上階室にアクセスしてください。

→ 木造の小階段を通って、弩(おおゆみ)展示室の方へお進みください。

この部屋には、戦闘用や狩猟用の強力で命中精度の高い弩の数々を集めた見事なコレクションが展示されています。

弓がさまざまな材料でできた弩は、腹帯(左側の矢狭間にある胸鎧の帯を参照)にかけたS字状の鈎を使って引きます。

弓は牛の角、木材、腱を用いて作られています。その後、鋼鉄製の弓が使用されるようになります。

これに続いて、鎧付き弩が誕生します(入口から入って右手にある陳列ケース)。これは特に騎兵隊が使用したものです。

弩はますます強力になり、滑車装置とも呼ばれる弩をぴんと張るための器具(左側の矢狭間)を使用するほどでした。大型で扱いにくく、速射性に欠けるこのメカニズムは、要塞の守備や包囲の場合に歩兵によって用いられました。

弦巻上式弩は、滑車装置を備えたタイプと比べて同等の効果を発揮するにもかかわらず高速で、場所も取りません。軍隊でこのシステム(ダブルショーケースの中)を最後に使用したのは、フランソワ1世の騎馬近衛兵でした。

小球用弩(ニッチに収められた大型のケースの中)はとても軽く、兔や野鳥などの小動物の狩猟に最適です。この弩を使って、テラコッタまたは鉛の小さな丸い球を飛ばすことができます。

装備をまとった騎士と馬の姿を描いたシーンが展示されています。プラット甲冑が兵士の全身を覆っているのに対して、さまざまな甲冑で構成される「馬鎧」によって馬の急所が覆われています。

2016年制作の壁画は、「九偉人」の作品群です。騎士を描いたこの制作プログラムは、騎士道を体現する偉大な人物とされた英雄三人を一組とした三段構成になっています。奥の正面から左に向かって、異教徒の偉人ヘクトール、アレクサンドロス大王、カエサル、ユダヤ人の偉人ヨシュー、ダビデ、ユダ・マカバイ、そして右側にキリスト教徒の偉人アーサー王、シャルルマニュ、ゴドフロワ・ド・ブイヨンとなっています。15世紀ヨーロッパ独特のこの装飾は、理想の騎士像に自らの姿を重ね合わせた貴族たちに大変好まれました。「デトランプ」技法(天然顔料をカゼインの中に溶いてドライ石膏に塗る絵画技法)を用いて描いたもので、当時の色調が忠実に再現されています。

→ 部屋を出て左手にある狭い階段を上り、ドンジョンの上階室にアクセスしてください。

→ 木造の小階段を通って、弩(おおゆみ)展示室の方へお進みください。

ドンジョンの下階室

この部屋には、戦闘用や狩猟用の強力で命中精度の高い弩の数々を集めた見事なコレクションが展示されています。

弓がさまざまな材料でできた弩は、腹帯(左側の矢狭間にある胸鎧の帯を参照)にかけたS字状の鈎を使って引きます。

弓は牛の角、木材、腱を用いて作られています。その後、鋼鉄製の弓が使用されるようになります。

これに続いて、鎧付き弩が誕生します(入口から入って右手にある陳列ケース)。これは特に騎兵隊が使用したものです。

弩はますます強力になり、滑車装置とも呼ばれる弩をぴんと張るための器具(左側の矢狭間)を使用するほどでした。大型で扱いにくく、速射性に欠けるこのメカニズムは、要塞の守備や包囲の場合に歩兵によって用いられました。

弦巻上式弩は、滑車装置を備えたタイプと比べて同等の効果を発揮するにもかかわらず高速で、場所も取りません。軍隊でこのシステム(ダブルショーケースの中)を最後に使用したのは、フランソワ1世の騎馬近衛兵でした。

小球用弩(ニッチに収められた大型のケースの中)はとても軽く、兔や野鳥などの小動物の狩猟に最適です。この弩を使って、テラコッタまたは鉛の小さな丸い球を飛ばすことができます。

装備をまとった騎士と馬の姿を描いたシーンが展示されています。プラット甲冑が兵士の全身を覆っているのに対して、さまざまな甲冑で構成される「馬鎧」によって馬の急所が覆われています。

2016年制作の壁画は、「九偉人」の作品群です。騎士を描いたこの制作プログラムは、騎士道を体現する偉大な人物とされた英雄三人を一組とした三段構成になっています。奥の正面から左に向かって、異教徒の偉人ヘクトール、アレクサンドロス大王、カエサル、ユダヤ人の偉人ヨシュー、ダビデ、ユダ・マカバイ、そして右側にキリスト教徒の偉人アーサー王、シャルルマニュ、ゴドフロワ・ド・ブイヨンとなっています。15世紀ヨーロッパ独特のこの装飾は、理想の騎士像に自らの姿を重ね合わせた貴族たちに大変好まれました。「デトランプ」技法(天然顔料をカゼインの中に溶いてドライ石膏に塗る絵画技法)を用いて描いたもので、当時の色調が忠実に再現されています。

→ 部屋を出て左手にある狭い階段を上り、ドンジョンの上階室にアクセスしてください。

→ 木造の小階段を通って、弩(おおゆみ)展示室の方へお進みください。

ドンジョンの上階室

この部屋には、14世紀と15世紀の調度品のコレクションが展示されています。

中世期、調度品の数はきわめて限られており、領主の移動があるたびに、旅先まで運ばれました。毎回、必需品としてタペストリーや織物、食器類を運んだため、これを収納するための家具もいくつか必要でした。

ステルノー城のコレクションには、くるみ材の小型の収納箱、大型荷物ケース、収納箱付き長椅子、収納箱付きの高い背もたれのある椅子、肘掛け付き折り畳み式スツールが収蔵されています。

右手の、ニッチと呼ばれる壁の窓には、着脱式の薬室によって薬が容易に行える後装式大砲が展示されています。

陈列ケースに展示されているのは火縄銃です。こうして武器が軽量化されたことで、兵士は一人で持ち運びができるようになり、新しい点火システムによって他の兵士の助けが不要になりました。

窓の右側の陳列ケースに火壺に混じって展示されているのは、ドイツ製の青銅製警砲です。ゴシック体で、以下のような内容の碑文が刻印されています。

我が名はBülin van Efentür。
私は火薬を食べ、火を吐く。

→ 砲塔を出ると、かつては屋根のあった住棟の階へ通じる階段があります。

→ 木造の小階段を通って、弩(おおゆみ)展示室の方へお進みください。

ドンジョンの上階室

この部屋には、14世紀と15世紀の調度品のコレクションが展示されています。

中世期、調度品の数はきわめて限られており、領主の移動があるたびに、旅先まで運ばれました。毎回、必需品としてタペストリーや織物、食器類を運んだため、これを収納するための家具もいくつか必要でした。

ステルノー城のコレクションには、くるみ材の小型の収納箱、大型荷物ケース、収納箱付き長椅子、収納箱付きの高い背もたれのある椅子、肘掛け付き折り畳み式スツールが収蔵されています。

右手の、ニッチと呼ばれる壁の窓には、着脱式の薬室によって薬が容易に行える後装式大砲が展示されています。

陈列ケースに展示されているのは火縄銃です。こうして武器が軽量化されたことで、兵士は一人で持ち運びができるようになり、新しい点火システムによって他の兵士の助けが不要になりました。

窓の右側の陳列ケースに火壺に混じって展示されているのは、ドイツ製の青銅製警砲です。ゴシック体で、以下のような内容の碑文が刻印されています。

我が名はBülin van Efentür。
私は火薬を食べ、火を吐く。

→ 砲塔を出ると、かつては屋根のあった住棟の階へ通じる階段があります。

→ 木造の小階段を通って、弩(おおゆみ)展示室の方へお進みください。

ドンジョンの上階室

この部屋には、14世紀と15世紀の調度品のコレクションが展示されています。

中世期、調度品の数はきわめて限られており、領主の移動があるたびに、旅先まで運ばれました。毎回、必需品としてタペストリーや織物、食器類を運んだため、これを収納するための家具もいくつか必要でした。

ステルノー城のコレクションには、くるみ材の小型の収納箱、大型荷物ケース、収納箱付き長椅子、収納箱付きの高い背もたれのある椅子、肘掛け付き折り畳み式スツールが収蔵されています。

右手の、ニッチと呼ばれる壁の窓には、着脱式の薬室によって薬が容易に行える後装式大砲が展示されています。

陈列ケースに展示されているのは火縄銃です。こうして武器が軽量化されたことで、兵士は一人で持ち運びができるようになり、新しい点火システムによって他の兵士の助けが不要になりました。

窓の右

ご見学ありがとうございました！

よろしければ、以下もご利用ください
ライブラリー・ショップ。
年間を通じてオープン



カステルノー城
歴史的建造物
24250 - Castelnau-la-Chapelle
電話 : 05 53 31 30 00
KLEBER ROSSILLON

ウェブサイトでカステルノー城の最新ニュースをご覧ください

www.castelnau.com 

コレクションは以下のサイトでもご覧いただけます://castelnau.omeka.net

投石機展示室

この展示室には、実物の10分の1に復元された、トレビュシェット型投石機が展示されています。13世紀の軍事技師であったヴィラール・ド・オヌクールの設計図を元に復元されたこの武器は、梁の部分から投射物が発射されようになっています。その大きさ(高さ30メートル!)と効果が低いことを考えると、この武器は実際に一度も作られなかっただろうと想像されます。

→ 次の展示室に進み、10分の1の大きさに作られた兵器の模型をご覧ください。

ライブラリー・ショップでは、専門書、攻城兵器の模型、タペストリーの複製、宝石の複製、グラス、ペン、インク、カリグラフィー用の葦ペン、その他オリジナルのお土産などを販売しています。

ペリエール(投石機)は、弩砲と同様に引張力を利用した兵器で、人が綱を引っ張り、アームの部分を跳ね返させて石を飛ばします。

飛ばす動力を上げるために、中世の技師たちは、歯車型マンゴネル、トレビュシェット、クイヤールのような、機械の力によって作動する、より強力な兵器を生み出しました。

これらの兵器はすべて木製であったため、今日まで残っているものはありません。ヴィラール・ド・オヌクールやコンラート・カイザーといった軍事技師の報告書、細密画、画帳、協定書を元に、これらの兵器の復元が可能となりました。

壁のくぼみの展示ケースには、古代で使われた武器であるカタパルト、塔車、破城槌の20分の1の模型が展示されています。

階段には、コンラート・カイザーによる素描の複製が掛けられています。

長槍の右側に展示されている様々な農具は、長槍の原型を想起させるものです。特定の必要性に応じてこうした武器の形に進化する前に、道具類は人間が用いた最初の武器であったはずです。

これらの道具類の右には、槍試合に用いられた道具が展示されています。「裾広かり」の甲冑は、鋼鉄の裾の部分が下半身を保護するようになっており、騎乗しない槍試合の際に身に着けたものです。「ヒキガエルの頭」と呼ばれた大きな兜は、敵の槍を打碎くか敵を落馬させた者が勝ちとなる「GESTECH」と呼ばれるドイツ式槍試合に使われたものです。最後の展示物は、多少驚くような、注目に値する品です。これは兜の頂飾りで、槍試合に出場する者が誰であるか見分けがつくように付けられたものです。

→ 階段を降りて、他の展示室をご見学ください。

武器展示室

刀剣類

短剣は歩兵がベルトに付帯するものでした。短剣は、奇襲によって人を殺すのに威力を発揮しました。弓兵もまたこれを付帯していました。弓矢での攻撃の後、短剣によって倒れている敵の息の根を止めました。

壁の陳列ケースの短剣

剣は、中世における武器の中で主要なものでした。剣の刃は、切断、貫通、受け流しができるよう作られています。中世の剣のほとんどは、刃がまっすぐで幅広く、両刃になっていました。十字型のつばと柄頭を持ち、歯止めとなっている取手の部分から手が滑らないようになっています。

→ 14世紀と15世紀の剣

突撃用武器
から竿、斧、ハンマー、大槌型武器は、その重さや、刃や、切っ先を用いる武器です。

長槍
多様な種類があるこの長槍は、歩兵が持つ武器で、隙間なく並んだ隊形を取る彼らは、騎兵による攻撃を恐れませんでした。様々な形をした鉄の穂は、かなり長い木製の柄の先に取り付けられています。長槍は、形によって様々な名前が付けられています。
◆ 雜刀型の槍、長柄鎌型の槍、バルディッシュ、鉢槍、鉤付き槍、短槍…

長槍の右側に展示されている様々な農具は、長槍の原型を想起させるものです。特定の必要性に応じてこうした武器の形に進化する前に、道具類は人間が用いた最初の武器であったはずです。

展示室を出て、上の中庭と呼ばれる場所を通りていきます。この中庭には、城での生活における重要な要素である井戸が掘られています。井戸は46メートルの深さで、地下水からくみ上げるようになっています。この中庭は、巡回路を上にのせた15メートルの高さの幕壁によって取り囲まれています。

外堀
主要な出入口を過ぎると、堀の上に木製の階段が渡され、それが外堀に通じています。この建造物は城の入口を守るものでした。壁にはいくつもの銃眼が開けられ、丸天井には入口を監視する三角形の穴が一つ開けられていました。これは、入口から入ってくる攻撃者の頭上に、防護者が物を落とすための穴でした。

→ 階段を降りて、他の展示室をご見学ください。

内部見学コース終盤

城外

側庭は、城と村を隔てる第一城壁と、ドンジョンを保護する幕壁の間のスペースです。中世時代、ここには鍛冶場、かまど、厩舎がおかれ、時には職人(織工、陶工など)の屋台が出ることもありました。城が攻撃された時には、村人の避難場所ともなりました。

ペリエール

ペリエールは、「人力による引張力」を使った兵器です。威力では劣りますが、古さでは他に勝ります。これは防衛のための兵器と見なされており、騎兵による攻撃には大変効果がありました! 実験では、1kgの砲弾が時速140kmの速さで標的に当たることが確認されています。

→ 次に、稜堡の方へ移動してください。稜堡にのぼって攻城戦に使われた実物大の兵器をご覧ください。

マンゴネル

12世紀末に登場したこの兵器は、固定式の数トンの重りを用います。後にトレビュシェットに用いられるようになった連節式の重りの利点を技師たちはまだ知りませんでした。そのため、支柱を下におろすために、多大の労力を要しました!

トレビュシェット

おもりを使った武器に属するこの兵器は、16世紀まで使われました。1時間に2、3回と、投石間隔が長かったにもかかわらず、中世で最も強力な兵器でした! 抑止効果が抜群に高く、ただその姿を見せるだけで、数々の場所を降伏させました! 石の砲弾には、鉄の輪をはめたものもあり、それらは重さが200キロを超えていました。

クイヤール

2つのカウンターウエイトが付いたこのおもり式投石機は、中世の投石機では最も効率的なものでした。射程距離は180mで、重さ30kgの砲弾を1時間におよそ10発発射でき、操作も10人ほどしか必要ありませんでした。

射石砲

扱いが大変難しい兵器です。再び装填する前に、砲が冷えるのを待たなければならぬため、砲撃間隔が長く、1時間に最大で1回の砲撃が可能でした! 待つ間、攻撃者は、車輪のついた大きな盾である木製の遮蔽物の陰に入って待機しました。敵を監視したり、弩(おゆみ)を使ったりするために、遮蔽物には三角形の穴が開けられていました。



下に降りると、中世の庭がご覧いただけます。この庭は、使いをした、幾何学模様の庭となっています。何よりもまず実用性が優先されており、栽培されている植物は、ほとんどが薬、染料、料理に使われました。

